S-9　高気圧酸素治療の現況
九州・沖縄地区

有川和宏

（検見崎病院）

九州・沖縄地区の第1種高気圧酸素治療装置の稼動現況を知るため，安全協会ニュース2002.11に基づき，本機を有すると思われる169施設に対してアンケート調査を行ないました。回答は81施設（47.9%）で，うち現在稼動していない等の理由で対象外とした6施設を除いた75施設（44.4%）での治療現況を検討しました。治療症例数の合計は20725例に及び，1年間の治療平均症例は1施設あたり276.3例となりますが，施設ごとのばらつきが大きく2例から1049例を示していました。疾患別にみると脳血管障害（非救急）4138例，22.8%，脊髄障害（非救急）3369例，18.6%，イレウス（非救急）2723例，15.0%，脳血管障害（救→非）1772例，9.8%，脳血管障害（救急）1581例，8.7%，イレウス（救急）1295例，7.1%，顔面神経麻痺（非救急）970例，5.3%の順でした。救急，非救急別に分けないで純粋に疾患別にみると脳血管障害が7491例，31.2%と約3分の1を，次いでイレウスが4519例，24.8%と約4分の1を占めています。次に多いのは，脊髄障害3550例，19.4%でイレウスと逆転しています。その理由としてイレウスでは救急適応が多いのに対して脊髄障害では急性期からの導入が少ないためと思われます。少数派に目を向けると，悪性腫瘍，減圧症，ガス壊疽，心筋梗塞，放射線障害での使用が少ないことが分かります。悪性腫瘍での使用が少ないのは高気圧酸素療法の効果が未だ認識不足によるものと考えられ，減圧症は2種大型装置での治療に譲られた結果，奄美大島や沖縄諸島での離島での治療が主でした。ガス壊疽は発生頻度がこの程度と思われます。心筋梗塞ではCCUネットワーク等の充実で本法がファーストチョイスとならない事実を物語っているものと考えられます。放射線障害も発生頻度そのものが低くこの程度の数値に止まっています。高気圧酸素療法の適応に銘記されているスモン病での使用は今回1例もありませんでした。また悪性腫瘍，骨髄炎，末梢神経障害，放射線障害では疾患の性質上救急適応での使用が少ない事実も肯けます。

S-10　高気圧酸素治療の現況
ー第2種装置ー

伊東範行[1)]　鎌田　桂[2)]

（1)千葉県救急医療センター
2)岩手医大高気圧環境医学室）

【目的】第2種装置による高気圧酸素治療（HBO）の現況について最近の2年間の動向と1991年から1992年の任意の1年間の状況を比較してHBOの推移について検討しその問題点を明らかにする。

【方法】全国共通フォーマットにより北海道，東北，北関東，千葉，近畿，中国地区の第2種HBO装置を保有する施設にアンケートを行いHBOを行った症例について病名，回数，救急適応，非救急適応について回答を得た。

【結果】19施設にアンケートを依頼し16施設（84.2%）より回答を得た。このうち2施設は治療を行っていなかったり装置を破棄していた。また1991年から1992年当時の資料がないか不十分な施設4，装置を導入していなかった施設が2施設であった。この結果アンケート分析は2001～2002年については14施設について，1991～1992年の任意の1年については8施設について行った。2001年から2年間の施設の症例数では26から629とばらつきが見られ全体では救急適応症例は1068例，非救急適応は1967例であり，救急が35.2%を占めていた。救急適応については地域間に差が認められ，北関東・千葉地区では救急が76.5%と救急主体の治療が行われているが，他の地区では20～24%であった。

一方1991～1992年の任意の1年間には1390例にHBOが行われ，10年間での症例の増加は9.4%であった。HBOが行われている疾患では救急ではイレウス425例，突発難聴209例，CO中毒89例，非救急では突発難聴780例，脳血管障害215例，顔面神経マヒ190例が主体であった。